

福田恆存における批判精神と自我の構造

—近代化の問題めぐって— (1)

村永 次郎

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Frame of Critical Mind and Self in Fukuda Tsuneari

—In Reference to the Problem of Modernization of Japan—

MURANAGA Jiro

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

As a man of letters, critic and dramatist, Fukuda Tsuneari faced squarely the problems of self and egoism, and struggled his way through incomprehensible matters of human nature and existence. Beginning with the basic question of what humans are born for, what they live for, and how they ought to live, he further went on to ask what human society and social life ought to be, and pushed the question to its logical extremity. He also discussed the modernizing process of Japan since the Meiji Restoration, emphasizing that Japan was too busy in introducing the Western civilization, too much absorbed in material civilization to realize the mental aspects of civilization and the underlying spiritual principles. What was Fukuda Tsuneari that inquired into questions human, literary, social and historical? And what did he think and do? This essay is concerned with the person he actually was, and his thoughts and actions.

はじめに

19世紀の半ば、アメリカのペリーの来航以来、我が国は長年の鎖国政策を変換し開国した。と、言うより開国せざるを得なかった。圧倒的な力を持った西洋文明との接触は、「外圧」の脅威と植民地化への危険意識を多くの者に抱かせた。

幕末以降、特に明治維新以来、日本の独立を堅持し列強に伍し対抗するための近代化が緊急課題となり、富国強兵政策が強力に推進された。当時の代表的知識人である福沢諭吉は、次のように述べている。

然りといえども、今世界中の有様を見れば、処として建国ならざるはなし、建国として政府あらざるはなし。政府よく人民を保護し、人民よく商売を勤め、政府よく戦い、人民よく利を

得れば、これを富国強兵と称し、その国民の自から誇るは勿論、他国の人もこれを羨みその富国強兵に倣わんとして勉強するは何ぞや。宗教の旨には背くといえども、世界の勢いに於いて止むを得ざるものなり。(中略) 国と国との交際に至りてはただ2ヶ条あるのみ。いわく、平時は物を売買して互いに利を争い、事あれば武器を以て相殺するなり。言葉を替えていえば、今の世界は、商売と戦争の世の中と名くるも可なり。 (『文明論之概略』 p. 273)

弱肉強食の法則が支配する国際状況の中で、後進国日本という自覚に達した福沢は、対外的「独立」こそが最優先的な目的であり、この目的のもと、西洋文明を摂取し、欧米列強に支配された国際社会に組み込まれた日本は「商売と戦争の2ヶ条」の間を

縫って進むことが不可欠であると力説した。

武士（封建家臣）であり西洋兵学者でもあった佐久間象山は、「東洋道德、西洋芸術」¹を唱え、朱子学と西洋の自然科学との「理」は同じであり、東洋の倫理道德を補完するために西洋の進んだ技術を積極的に取り入れるべきだとした。即ち、「和魂洋才」思想である。この点に関して中村光夫は、以下のように語る。

西洋文明をいかにとり入れても、その根底をなした武士道徳や人生観が（輸入された諸価値と矛盾しながら）強い力で生き残るという結果を生んだので、このことは、当然、そういう立場から選択され輸入された西洋の文明が偏った一面性を持つという事情も伴って、近代の日本人の生きかた、ひいては国家の運命にも、大きな禍根をのこしたといえます。

（現代日本思想史講座Ⅶ 『近代化と伝統』 p. 22）

非西欧の後進国が西洋列強に次々に植民地化された当時の事情に鑑みれば、明治政府に選択の余地はなく、むしろアジア諸国の中で類例のない順調な近代化の道を歩み、驚異的な成果を上げた。

しかし、このような性急な日本の近代化（以下、近代化問題）に関し福田恆存（以下、福田）は多くの指摘を行って来た。その中でも、『反近代の思想』において、日本の近代の特殊性について次のように述べる。

近代の超克とはいったいなにごとであるか。

（中略）近代の超克とか克服とかをいう前に、まず何よりもわれわれはいまだ借り物としての近代性しかもち得ていない 日本の近代の特殊な歪みや宿命を直視しなければならないからである。

（現代日本思想大系 3 2 『反近代の思想』 p. 13）

日本は、後進国としての宿命であり必要悪であった近代化をせざるを得なかった。更に、近代の確立と同時に克服を問題にしなければならなかった。この特殊性の認識を持たないため、既製品としての

「文明」を得ることには成功したが、文明を生んだ精神（福沢の言う「文明の精神」）を学ばず、和魂との衝突を回避した。その結果、我々自身の「文化」を客観的に認識する途を失い、そのことによる混乱が今日に至るまで続いている。

永井荷風は、本物の西洋を見た。遊歴より帰朝直後、西洋化された日本の風俗、日本人の生き方に疑問を抱き、次のように述べている。

ただその外形の方法ばかりを応用すれば、それで立派な文明は出来るものだと思っている。形ばかり持ってきても内容がなければなんにもなるものか。（中略）日本の欧州文明の輸入は実に醜態を極めたものになったのだ。

（現代日本思想大系 3 2 『新帰朝者日記』 p. 88）

福沢の言う文明の外形だけを応用し、内容、すなわち文明の精神を無視していると言う怒りである。

谷崎潤一郎は日本の生活様式が西洋風となり、日本人の洗練された美意識が破壊され、生活全体と釣り合わない不調和に耐えている日本人の生き方の矛盾を突いて、次のように述べている。

病院の壁の色や手術服や医療器械なんかも、日本人を相手にする以上、ああピカピカするものや真っ白なものばかり並べないで、もう少し暗く、柔らかみを付けたらどうであろう。もしあの壁が砂壁か何かで、日本座敷の畳の上に臥しながら治療を受けるのであれば、患者の興奮が静まることは確かである。

（現代日本思想大系 3 2 『陰翳礼讃』 p. 123）

日本の近代化の実態は、内容として日本の文化に合わない外形を模倣した西洋化に過ぎなかったということである。

福田は、この近代化のあり方にまつわる問題を重要視し、生涯深く取り組み機会ある毎に批判を続けた。自らは演劇活動によりそれまでの主張を行動に移し演劇の近代化を図ろうとした。

福田は自らの活動を3期に分けている。その第3期にあたる昭和43年、戯曲『解かってたまるか!』

を発表した。在日韓国人が暴力団員2人を射殺し旅館に人質をとって立て籠もった事件を題材にしたものである。この戯曲を詳細に見ると、福田が主張してきた内容がほとんど網羅されていることに気づく。

登場人物は、犯人、人質、警察、新聞社、知識人、デモの学生である。彼等は個人的エゴ、集団的エゴを丸出しにし、自己欺瞞を露出する。しかし、犯人すなわち福田に悉くその虚像を打ち砕かれる。全てが物質文明の近代化の恩恵を受けている人達である一方、精神の政治学—精神面の近代化—が出来ていない似非近代人なのである。

例えば、犯人村木がアメリカ大使館に射撃し混乱に陥った時、警察の副本部長は次のように人質に対して発言する。

春野の声 (略) 一つ村木を説得して、デモ騒ぎが治まるまでライフルもダイナマイトも絶対に使用しない様に頼んで下さい、事は日米関係の友好という政治的大問題に繋がっているのです…………、頼みますよ、奥澤さん…………、それとも一つ…………、さっきのダイナマイトは村木が投げたのであって、吾々は勿論、アメリカ大使館が用いたのでもない事を自ら証言して貰いたいです…………、その為には吾々はあらゆる手立てを講じます…………、唯単に日本国民に対してばかりでなく、アメリカ全土に対しても一言弁明して頂きたい。

いつの間にかアメリカとの関係より、人質救助の優先順位が低くなっているのである。集団的エゴ丸出しの、組織的防護の発言である。

新聞社も、ご都合主義の無責任発言のしたい放題である。特種のためには犯人村木に対しては胡麻をすり、立場の弱い警察に対しては高飛車でやる。公共性の強い新聞社も結局は自分達中心であり、人質救出のため警察と協力する態度など微塵も見せない。次の会話に新聞社の態度が顕著に現れている。

明石 (略) 村木さん、あなたは完全に大衆を吾がものにしてしまいましたよ、尤も、それも新聞のお陰と言えはお蔭ですがね、殊に吾が中央…………。

村木 新聞よりテレビだよ、助さん、テレビでは人相や表情が話し手の微妙な心理を伝えるからな。

明石 しかし、活字というのはまた別の説得力を持っていますよ、どんな嘘でも活字によって現されると、抵抗し難い客観的真実という感じが出てきますからね。

いわゆる知識人としていかにも国民のために自己を犠牲にして活動する文化人。人権の確保、差別の撤廃による平等の実現等全体の平和、安心のための行動のように見せる。その実、本人の個人的名誉、物理的欲求の満足などを内に秘めた自己欺瞞の人間達である。

現実の具体的・個別的問題を抽象的・一般的問題に拡大飛躍させ、美辞麗句で問題の核心を誤魔化し、問題が自分との直接の関係から離れるように仕向ける。そうすることにより、自分一人だけの問題でなくなり荷が軽くなる。また、さしあたって、どうこうする事柄でもなくなり行為の責任から免れる構図である。例えば、このような件がある。

山中 この地上から凡そ差別と名のつくものを悉く抹殺してのけなければならない、その為なら、私はあなたに対して全面的協力を惜しみません、もし世間が、そして俗世間の法律が、村木さんを殺人と不法監禁の罪によって罰しようとするなら、吾々人権擁護法曹団の弁護士一同は挙国一致の態勢を以ってあなたの正当性と無罪を主張し一歩も譲るまいという事を決議し、主として私が弁護に当たる事になりました。

デモの学生達も、知識人と同じく本気ではない、命懸けでないことを指摘される。村木との間で次のような会話がある。

村木 (略) おい学生さん達、直ぐ舞い戻って仲間を呼んで来な、そして皆でここにあるダイナマイトを運び出し、アメリカ大使館を吹き飛ばしてしまえ、それで万事めでたし、めでたしさ……、安保は忽ち解消、アメリカは日本から手を引く、そうなれば、ベトナム戦争も終わりさ。

学生一 大丈夫ですか、そんな事をして？

村木 怖いのかい？それともダイナマイトの使い方を知らないと言うのかい？

学生二 援護射撃をしてくれるとおっしゃってもライフル一つでは、大した効果はないと思います……、僕達がダイナマイトを使えば機動隊だけでなく、当然、自衛隊も出動して来るでしょうし、そうなれば内戦覚悟で戦はなければなりません。

学生三 そうです……、それならそれで僕達の組織をもっと強固なものにしてからでなければ無理です……いずれにせよ、委員長初め幹部と相談してからでなければ……。

人質達は様々な過去や特性を有し、村木の言われるまま信奉し言動する男達、この男達と違って村木から逃げ出そうと行動する女達、日本人と行動様式の違うドイツ人と多様な集団である。女達は男達の対極にあり支配を受けない人間達、言葉でなく行動で意思表示する。強い存在である村木に接した時、男達は超人的な彼に従属することにより自分達まで高められている錯覚を抱き、女の人質達は、逆に、村木に反抗し脱走しようとする。

D. H. ロレンスは、人の心理には英雄を認めてこれに讃仰をささげ臣従せんとする集団的側面があると指摘する。² 人質の男が次のように言っている。

奥澤 (略) 村木さんのお蔭で何となく私達まで偉くなってしまった様な気がして来ましたよ。

また、人質の女組みが逃走しようとした時、次のように言っている。

奥澤 女だてらに何だ！

甘粕 様を見やがれ、人を甘く見やがって！

栗林 村木さんに手を突いて謝れ！

甘粕 人の信用を裏切った見せしめだ！

一同 村木さん、大丈夫ですか、お怪我は？

こういう行動は全く福田の虚構と言えない。当時、朝日新聞に、解放された三人の言葉として次のようにある。

皆で金を押さえ込むチャンスは何回かあった。金さんが私達を全く信用しているので信用を裏切りたくないという気持ちでした。とにかくホットしました。あの人を憎いと思いません。
(S 4 3. 2. 2 5 朝日新聞)

人質は一般的な国民を代表し、彼等は強いものに従うか、逆らうか、どちらかにならざるを得ない弱い存在として描かれている。それは、ロレンス、福田の指摘する人間の二面性である。

同じような問題は2007年時点においても生起している。広島、長崎に代表される平和運動。戦争、平和、人権、自由など、言葉の真の意味は理解されていない。拉致問題。人を拉致するという国、人権の侵害を非難し、対応が悪ければ経済制裁を叫ぶ。国としての理念、向かうべき目的・目標が明確でないため北朝鮮の対応に毅然とした態度をとれない。相手に翻弄されるのが落ちである。社会保険庁における年金問題。自らの事ばかり優先し国民を愚弄するのも甚だしい。挙げれば切りがない。現象としては違うように見えるが、本質的には自我との対立の不徹底、精神の政治学の不在という問題、すなわち近代化問題である。

福田は様々な現象の奥に潜む本質的な事を重要視する。近代化問題は、まさに本質的な問題であり、幾つか例示したように現代においても認識されず、それどころか無意識のうちに益々幅広く拡散、また深く潜在し判りづらくなっている。

近代化問題は、明治以来、後進国日本が(そして非西欧の後進諸国が)宿命的に抱えている問題であ

り、解決されないままである。従って、福田の研究は今でも古くはなく、皮相的な問題点の把握、解決策の繰り返しから脱却し、近代化問題の本質的究明をしなければならない。そのための足掛りとして、福田の思想を体系的に把握するとともに近代化問題の全体像を明らかにする。

1 福田恆存の生涯と人物

1. 1 生涯の概略

福田は、東京の下町、本郷で生まれた。『福田恆存全集1』「覚書1」によると、職人の家庭（父は、東京電燈株式会社。父の兄3人も筆筒職人。母の父も母の兄弟2人も職人）に育ち、小学生から大学生まで近くに友達がなくて孤独な生活を送った。というより、むしろ孤独を好み、気質的にも良くも悪くも職人であったとある。

東大英文科を卒業後、文芸評論家として出発する。東京女子大講師などを経て、文学や政治、教育など各種の評論、劇作、翻訳と多彩な分野で活躍した。福田の性格は、福田自身がよく知っており、次のように語っている。

その頃の私は用の無いおしやべりが苦手で、むしろ孤りを好んだ。私は気質的には良くも悪しくも職人であり、下町人種であったのだ。
（『全集1』覚書1 p. 657）

卒業論文はロレンスを取り上げ、大学院ではレポートとして「マクベス論」を書いた。浦和高等学校時代に戯曲に興味を持ち、築地座の脚本募集に応じて入選したこともあり、文学に関する能力に恵まれていた。

大学院修了後、静岡県立掛川中学校に先生として赴任するが、校長と喧嘩して辞める。この時のエピソードとして土屋氏が書いている。

当時、掛川中学は野球が強く、甲子園出場を目指して校長をはじめ全校が野球に熱狂していた。福田は「今から考へれば若気の至りと笑つ

て過せるが、私はお蔭でその学校をお払ひ箱になった。五年生の投手の白紙答案に零点を付けたのと、小学校から有力選手を引張るため、入試に落第点を探った子供に入学許可を与へようとする及落会議で反対意見を述べたのと、その二つの理由による」と説明している。

（『福田恆存と戦後の時代』 p. 256）

福田の潔癖性をよく物語っている。信念を通し、要領のいい生き方を許さない。戦争中であったことも災いし、この後の職歴は複雑となる。

昭和21年（35歳）後半から文筆を職業とするようになる。それまでの間、『嘉村礒多』（昭和14年、28歳）、『芥川龍之介』（昭和16年、30歳）、昭和17年（31歳）に、ロレンスのアポカリプスを中心にロレンス論を書いている。

文筆活動を始めた頃には既に、完成体の相貌を見せており、終生、その思想は深まることはあっても揺らぐことはなかった。

強烈なインパクトを放ったのは、昭和29年の『平和論にたいする疑問』その他の論文で、非武装中立論や原水爆禁止運動における、進歩的文化人の立論の虚偽と脆弱性を鋭く指摘し、その態度を痛烈に批判、平和論争を巻き起こしたことである。

それまでにも、戦後の日本社会で昭和20年代頃から横行していた進歩的文化人の言動や、その結果として生じた左翼的風潮を、早くから孤立を恐れず批判してきた論客として知られていた。

昭和30年に外国旅行し、ロンドンでシェイクスピア劇に刺激され、帰国後シェイクスピア全集の翻訳を思い立つ。この仕事は、翻訳として特筆すべきものであり、名訳として高い評価を受け、岸田演劇賞などの賞を受けた。以後、戯曲を中心とした活動になっていく。昭和38年には、劇団「雲」と現代演劇協会を設立し、更にその考えを実践していく。

その間、福田の重要関心事項であった国語問題に関し、国語学会の重鎮である金田一京助博士と論争した。戦後の国語改革、福田曰く、改悪に対して、一貫して反対論を述べたばかりか、歴史的仮名遣いの原理の正統性を主張した。福田以外にはこれほど情熱的に頑な精神で反対した人物はいない。結果と

して国語政策が変わることはなかったが、主張を分かり易く『私の国語教室』として著した。

福田にとって、青天の霹靂だったのはチャタレイ裁判の特別弁護人を引き受けたことである。40歳の時であった。卒業論文がロレンスであったことが幸い、若しくは災いしたのだが、最終弁論を『愛とはなにか』で、ロレンスの解説の形をとって自らの主張とした。

60年安保に際しては「常識に還れ」と訴え、生涯「硬骨の常識家」としての面目を失わなかった。だがその結果、進歩的文化人達を敵に廻し孤軍奮闘しなければならず、論壇から「保守反動」の非難を受けたのである。しかし、臆することはなかった。『近代日本知識人の典型清水幾太郎を論ず』において、こう述べる。

平和運動も、反安保闘争も、天皇制も、憲法第9条も、原爆も、核も、ナショナリズムも、忠誠も、氏にとって必要とあらば、その他、何でも彼でも手当たり次第、保身の為の小道具、自衛の為の防壁として利用される。(中略) 清水氏が強調しているソ連の脅威を、氏自身、本当に感じているのかどうか、私には頗る疑わしい。

(「全集7」『近代日本知識人の典型清水幾太郎を論ず』p. 566、p. 567)

自分の考えが明確でなく、その時々々の風潮に右顧左眄する非を嘆じたのであるが、決して清水氏の人間性全体を否定しているのではなく、その論評の態度、対象に対する姿勢を批判しているのである。ここが他の批判者達との大きな違いであり、福田の人徳が現れている。

福田が、生涯を通じて問題意識を持って、ことある毎に批評し続けたのは、日本の近代化問題である。明治以降の日本の近代化は、西洋化で似而非近代化であるということだ。その近代化の負のしわ寄せが、一番新劇に来ていると演劇の近代化に力を注いだ。その中心となるのは、言葉、端的にはせりふであり、その事もあって言葉に関しては妥協を許さなかった。

1. 2 人 柄

福田の人柄を述べるには、福田をよく知る人物によるエピソードを紹介するのが適切であろう。福田と一緒に仕事をしたこともある土屋氏が、『福田恆存と戦後の時代』の中でエピソードを紹介している。

福田の職人氣質は、実生活においては勿論のこと、多くの著作に反映している。律義さ、義理がたさ、潔癖性、判官びいきなどがそれであり、偽善と感傷を嫌い、要領のいい世渡り上手の知識人を嫌うのも、理窟ではなく氏の気質に負ふところが大きい。

福田は物を粗末に扱えない質でもある。『物を惜しむ心』において、自分が、長年使ってきた物を惜しみ大切にするのは「けち」からではなく、「その物の中に籠められている自分の過去の生活を惜しむ気持であつて、吾々はその物を捨てる事によつて、自分の肉体の一部が傷付けられ切落される痛みを感じる」からだと言ひ、現代人が失った「物の中に人の心を見通せるといふ生き方」の大切さを説いている。

(『福田恆存と戦後の時代』p. 253)

この物を惜しむ心は、言葉を大事にする心に通ずる。日本人の血肉となっている国語を疎かにしていけない。明治以来、近代化を急ぐあまり、そのつけとして日本人は多くの文化を失ったのである。僅かに遺された日本固有のものは、自然と歴史と国語しかないという思いが福田には強い。それだけに、戦後の小賢しい言葉いじりにはどうしても我慢がならなかった。言葉を弄ぶ知識人の無責任な態度が許せなかった。

次男、福田逸氏が父、福田について生誕90周年の折、次のように述懐している。

たとえば頬かむりをして、唐草棋緑の大きな風呂敷に布困か何か大きな荷物を包んで、それを背負って、朝早くまだ暗さが残っているうちに交番の前をそそくさと通り抜ける。お巡りさんが追っ掛けて来て、「その荷物は一体何だ」と職務質問されたら、「いや、荷物背負って運動し

てるんです」と答えるとか（笑）。

（中略）

父は兎に角そういう遊び心というか、悪戯心というのが非常に強い人で、ただ言えることは、それはただ遊んでいるんじゃない。これ以上あんまり喋っちゃうと福田論になってしまうので、それは後半のシンポジウムにお任せしますが、そういう遊びの精神というのがあったから、真面目と不真面目がいつでも同居して遊んでられる。あるいは自分に距離を置けるというか、自分のことを距離を置いて見られる、何ごとにも距離を置ける冷静さというか。そういう距離の置き方というのができる人間だから、その距離を置かれたときに、とても醒めたものを感じることもありましたね。（中略）ある種、父の冷たさというか、厳しさというものを感じて、いたたまれなくなることも片方にあるという、これも事実ですね。

（「父 福田恆存について」 p. 195）

悪戯好きの一面とその反面である厳しさのエピソードである。最初の例に取り上げた、戯曲『解かってたまるか！』でも明瞭であり、ユーモアを大事にする。『芸術とはなにか』でも主張されている。ここで面白いのは、既に述べたことであるが、福田の思想、言葉は実際の行動が伴うことである。偽りのない性格が良く理解できる。

続いて、「親を尊敬するな」と言われ、次のように語っている。

自分の親なんか尊敬してるようじゃ駄目だと言うんですね。（中略）親の書いたものを読んでいるようじゃだめだと言われた。（中略）無意識のうちに距離を置くべきものがある。あるいは何か自分とも距離を置かなきゃいけないということを、何よりも父から学んだのではないか。

（「父 福田恆存について」 p. 196）

普通の親とはまさに正反対である。逸氏は親との距離感を学んだと言っているが、福田自身が、子供恐らく家族とも距離を置くことを、これも実践して

いたのであろう。

三島由紀夫が亡くなった時、次のように言ったとのことだ。

父も東京にアパートを構えてましたから、稽古が終わってからそこに二人で戻るタクシーの中で父が一言口にしたのは—それをそのまま三島由紀夫に当て嵌める気は今の私自身にはないんですけども—「右にしろ左にしろ、極がつくのは嫌いだ」と、ぽつんと言った。

（「父 福田恆存について」 p. 198）

知識人を批判してきた福田である。その時の批判の態度と全く変わらない。福田にとって、党派は関係ないのである。ここにも思想に揺れのない一貫性あるものが窺える。

平成6年、福田は亡くなった。福田の1番弟子と自他共に認める、松原正氏（現早稲田大学名誉教授）は、ある人から清水幾太郎氏との和解の仲介を頼まれ、先生は受けないだろうと思いつつ話を伝えた。その時、次のように答えたそうだ。

一俵の米を脱穀するとね、必ず10粒ばかりは脱穀されない殻粒が出るんだよ。僕の読者はね、その極く少数の脱穀されない殻粒なんだ。

（中略）僕が、清水さんと和解して、二人の和気藹々たる対談がどこかの雑誌に出たとしよう。すると脱穀されない殻粒の僕の読者が「なぜそんな事が」と云ふだろう。物書きは読者を裏切つちやいけないんだ。

（「清潔で公平な人だった」）³

同じく、早稲田大学教授の臼井善隆氏が、福田氏の死を悼んでこう述懐している。

G・オーウェルは、物書きには時流に媚びない「知的誠實」が何より大事だと信じてみたが、福田さんの何より見事な資質はさういふ知的誠實であつた。

（「福田恆存の死を悼む」）⁴

これだけでも十分、福田の人柄が窺える。だが、こんな驚く話がある。井尻千男氏が病気で亡くなる寸前の福田を訪ねた時、福田は「もうこの年は越せないかも知れませんね。」という趣旨の事を言われ、そんな病状が重いとは知らなかった氏は、「自分の死まで距離を置いて見ているのか。」と、驚いたそうである。このエピソードだけで十二分に福田という人間の信頼の高さに吃驚するに十分である。こういった人物の書く評論その他は、ただ外側からの「客観的」な評価に値するという平凡な言葉では言い尽くせない、本当に主体的に真摯なものを蔵している。

1. 3 ロレンスの影響

福田は青年期にロレンスから決定的な影響を受けたと言っている⁵。最初の出会いが、東京帝国大学文学部イギリス文学科在籍時で、卒業論文が、「D・H・ロレンスの倫理観」であった。30歳の時に、ロレンスの『アポカリプス』を翻訳、翌年ロレンス論を書いている。

アポカリプスとは聖書の黙示録である。ロレンスは、この神秘めいた魅力に乏しいアポカリプスからキリスト教の実態、人間の本質を別決する。

宗教は、殊にキリスト教は二元的相貌を具へることとなつた。強者の宗教は諦念と愛を教へる。が、弱者の宗教は強き者、権力あるものを倒せ、而して貧しきものをして榮光あらしめよと教へてゐる。

(『現代人は愛しうるか』⁶ p. 35)

ロレンスは、キリスト教の愛他思想を批判し、多数である弱者の宗教の実態を暴く。弱者は、強者である支配者を倒し自ら支配者になろうとする。これは現代社会の風潮であり、更に人間の根源的要求の存在を喝破する。

人が二人三人と集れば、殊にその際なにごとかを爲しとげようと欲するならば、その瞬間たゞちに権力が介入しきたり、かならずそのうちの一人が指導者となり師となる。これ

は絶対に避けうるものではない。

(『現代人は愛しうるか』 p. 41)

レーニン、リンカーンにおいても純粋な個人の状態を保っている限りは真の聖者でいられるが、人間の集団的自我に触れたら背教者になると指摘する。

このようにロレンスの思想は、「人間とは何か。」と言う、人間そのものを鋭く観察する人間観から発している。

福田が思想の根底に「人間観」を据えるのは、正にロレンスの影響なのである。ロレンスの縁から、チャタレイ裁判の特別弁護人を引き受け、最終弁論に手を入れ出版したのが、『愛とはなにか』であった。弁護人であるので、当然、ロレンスの思想を詳しく噛み砕き解説している。しかし、福田曰く、福田自身の主張なのである。⁷ここにロレンスの思想が、福田の血肉となっていることが窺える。

ロレンスはキリスト教の実態、人間の本質を見抜くが、他の人々は、「このような現代文明の実態を知っているはずであるのにはつきり言わない。」と、その虚偽に腹を立て人々の自己欺瞞が許せなかった。同時に、人間は相互の信頼関係を失ったのだと悲嘆した。⁸

ロレンスがヨーロッパ精神に反逆したのは、自己が真実の自己でありたかったからに他ならない。

ロレンスの生涯を通じた問は、人と人の間に橋が架けられるか否か、という一事であった。⁹

福田は、ロレンスによって眼を開かれ本質的な物の考え方を学び、人間観、世界観、歴史観などを身につけた。本質的な考え方だけでなく自ら挑戦して行く。第2期に展開される自我との対立、第3期での演劇活動で実践されて行き、成果として『人間・この劇的なもの』等の中で、信頼関係の重要性や演劇などを主張して行く。冒頭に引用した『解かってたまるか!』の部分にもロレンスの思想が展開されているのである。

2 福田の活動の特色

2. 1 批判精神—第1期

第1期は文筆活動を始めた頃から昭和23、4年頃までである。年齢からだとも38歳頃までにあたる。福田に決定的な影響を与えたロレンスに関しては、卒業論文に続いて、31歳の時、「アポカリプス」を中心にロレンス論を書いている。

福田の思想はロレンスを吸収し、この頃までには既に完成していたと思われる。『芥川龍之介Ⅱ』（昭和16年、30歳）には、その後展開された福田の主題が全て展開されていると述べていることから間違いないであろう。¹⁰ だが、福田の鋭敏さから言えば、卒業論文作成時には完成されていたかも知れない。

このように、福田の活動全体を通じる特徴は初期段階から既に完成体であったことである。以降、思想が深まることはあっても揺れることはなかった。第1期の思想的特徴としては「批判精神」である。細部は後述するが、福田の思想・主張はこの活動初期の段階では完成されており、それが一気に全力展開するのである。

正にこれを物語るエピソードがある。大学を卒業した年に「作家精神」の同人となり、この雑誌に初めての評論『横光利一』を載せた。当時の横光利一（38歳）は、若い時新感覚派の天才と言われたこともあり、「小説の神様」と呼ばれていた。その彼を、若干25歳の福田が批判したのである。それも通俗小説だと徹底的に批判した。¹¹

これで分かるように、活動し始めた若い頃から大いにポレミックであり、相手を恐れず信念に基づく、打算抜きでの行動であった。ただ単に論争好きなのではない。また、単純に相手を否定して自分の考えを通そうと言う、狭い見のものでもない。論争によって真に人間社会に役立つ主張への発展を期待する「批判精神」なのである。また全ての禍根とみなしている唯物論の矛盾を正そうとしていた。¹²

この時期、特に戦争直後の昭和23、4年頃までには乱世であったと述懐する。戦後の批評を特徴づけた抵抗と否定は既に力を失っている政治的弾圧に対する反発に過ぎず、世間の批評に対する興味も薄れていたのである。福田も当時の話題について語ってはいるが、それは批評家達の批評態度に対する抵抗だった。ただの批判だけでは発展しない、理想の姿

に近づかないと抵抗していたのである。

「近代」とか「自我」とかいふ言葉に人々が感じている重みも色あひも戦争中の反動でしかないと思ったのである。その主観的な情念のために、「近代」の限界も「自我」の正体も見えなくなっていることを、私は一所懸命に説得しようとしてみたのだ。

（『評論集4』後書p. 286）

このように述べ、福田が本質論で思考する特徴を表している。批判は対立の精神であり、その批判の対象が本質的ではない、つまり、日本の宿命にとって、文学にとって、真に本質的でないなら批評は空転せざるを得ない、と認識していた。思想が違うとは言え、福田も当時の話題、批評家達を相手にしていたために空転を余儀なくされてしまった。¹³

作家論のほとんどは第1期に書かれ、第2期以降、次第に書かなくなる。作家論は福田の必然性と文壇ジャーナリズムの必然性双方に従うことと考えていたが、それができなくなったためである。¹⁴ 福田の必然性とは真の自己にせまることである。

以上の理由から、第1期批判精神中心の活動からの脱出運動が始まる。が、その自覚は、批評が空転し始めた第1期後半から既にあった。真の自己にせまるためには対立の場を必然的に福田自身の内部に移さなければならなくなった。

それはかならずしも眼を内に向けた直接的な自己批評を意味しはしない。もつと普遍的に、自己と人間との本質に根ざして、対立を生きぬくことをやらなければならぬと私は感じたのである。（『評論集1』後書p. 294）

当時のマルクス主義者やその他の進歩主義者の、あまりにも安易な近代否定や近代肯定が、いずれも難しい「自我」を回避していることに対する憤りであった。自己批評の問題も同じであり、「自我」の主張、解体をめぐる「自我」に迫っていくことである。福田は第2期、こういった問題を更に追究していく。

2. 2 自我との対立—第2期

第2期は、昭和28年（42歳）の外国旅行前までの約4年間である。福田は、第1期の後半から、自己と人間との本質に根ざし、自我との対立を生きなければならないと感じ、小説、戯曲を書き始めた。真の自己にせまることを追究した、最も直接的な自己批評として『否定の精神』（昭和24年、38歳）を出した。この段階で人は満足する。しかし、福田の真骨頂はこれからである。

もっとも直接的な自己批評であったために、そこでは真に私の自己が語られてもみず、真に批評されてもみないのである。（中略）いかに眞實を語っても、嘘になるものだ。なぜなら、自分に自分を批評させてしまったのでは、私たちは眞の自己に到達できないのである。

（『評論集1』後書p. 294）

人は自らに甘いものである。眞の自己を追究する意志だけでも尋常ではないが、精魂傾けたはずの自己批評も批判の対象であった。福田の人間観からすれば、本人自身も例外ではないのである。いや、自分自身が一番厄介なのである。

ここで福田の述べる眞の自己批評とは「演戯」である。『芸術とは何か』（昭和25年、39歳）で演戯精神を強調し始めたのは、そういう自覚の兆しだった。文学は人間や人生のあり方などを追究するものであり、自我意識を無視できない。福田は、終生、この自我意識を徹底的に追究していく。

このように、第2期の特徴は自我意識の問題、自我との対立である。批判精神を中心とした第1期のポレミックの時代を経て福田の宿命、必然性である自我の問題と真剣に向き合い、本人称する神輿を担ぎ出す。自らの宿命に従い、自分の書きたい作品を書き始めた。

もう1つこの時期を特徴づける物がある。それはチャタレイ裁判である。卒業論文にロレンスを取り上げたことから、チャタレイ裁判の特別弁護人を引き受けることになった（昭和26年、40歳）。ロレ

ンスの作品、『チャタレイ夫人の恋人』（伊藤整訳、小山書店刊）が猥褻か否かの裁判である。当初は固辞するが、やってみたいという情熱もあり引き受け、勉強になったとある。¹⁵

福田の意識したチャタレイ裁判における敵は強大であった。それは、「世間の良識」であり「世論」、あるいは「性の意識」であった。始めから勝てないと思った。そこで福田は、狙いをロレンスの思想を広く世間に知らしめることとし、出来るだけ世間に通用する分かり易い言葉で説明した。

最終弁論は、『愛とはなにか』（昭和28年、河出文庫）と題し発行した。これは、単なるロレンスの思想の解説ではなく、福田の主張であった。

第2期は作家論から遠ざかり、人生論的には戯曲を書き、芸術論的には『芸術とは何か』を著した。自らの必然性に沿って、演出家というよりは役者になろうとした。「演戯」の実践である。第3期には、人生論、芸術論に磨きをかけて行くとともに演劇の近代化を目指していくこととなる。

2. 3 孤高の人—第3期

昭和29年（43歳）、外国から帰って来てからの活動が第3期にあたる。第2期は自らの宿命に従う自我との対立であった。第3期は外遊の時期を結節として、本当に書きたいことを書こうとした。1つは、ロンドンで観たシェイクスピア劇に刺激され、その全集翻訳を思い立ったことである。時事的な問題として3つあった。それは、知識人のものの考え方に根本的な疑問を呈すること、国語改良の似而非合理主義に反対すること、戦後教育の精神を却けることである。

シェイクスピアの全訳は、昭和30年（44歳）に取り掛かり、昭和34年（48歳）に『シェイクスピア全集』全15巻として、紆余曲折を経て刊行される。その間、時事的な問題の最初の1つが、『平和論の進め方についての疑問』になって現れ、2つ目は、金田一博士との論争により果たされる結果となった。3つ目は、評論集、『一度は考えておくべき事』の中で述べている。

第2期に神輿として『芸術とは何か』を現したが、

この第3期には、『人間・この劇的なもの』を書いた。本当に書きたいこととは、福田の考える「人間観」である。批判の対象である知識人、進歩主義者達は「人間観」を持っていないと、福田は見ている。人間観を述べても、彼等が納得するとは思ってはいなかった。福田は読者に期待するとともに自分自身の課題として、こう述べている。

もし納得を期待するなら、読者に期待しなければならぬ。私はそう思った。のみならず、私は自分自身で納得したかったのである。いいかへれば、私は自分の手で自分を追ひこみかけたのである。どこへでもない、「人間」のなかへ、「自分自身」のなかへ。

(『評論集2』後書p. 318)

正に、福田ならではの徹底した自分自身の中への追い込みであった。本人の言葉を引用するなら、「人間の自我始末法」であり、「自我の崩壊を通じてのその確立」、「喪失を通じての獲得」、「主張を通じての放棄」である。¹⁶ 自我の崩壊にまで行き着かないいかなる自我の確立をも福田は信じない。

このような自我との対立と同時にチャタレイ裁判以降、文壇に語りかけるより広く世間に語りかけることに興味を持ち始める。

福田は、第1期から信念に基づき、孤独を恐れず行動してきた。しかし、信ずべき批判の対象である知識人は福田の期待に反した。この時期に至ると、自分自身への追い込みと世間を対象とした、文字通り「孤高の人」としての活動になっていくのである。

過去の日本人論からの脱却を目指した、『日本および日本人』(昭和29年、43歳)を同じ年に、西洋と日本の文化の差を見つめた、『文化とはなにか』を書いた。神輿としての戯曲、『明暗』(昭和31年、45歳)、『明智光秀』(昭和32年、46歳)を代表とする、多くの福田戯曲を世間に提供した。

こうして第2期に決意した、「演出家から役者に」を実行に移していった。同時に、批評の充実と深化にもなった。

『人間・この劇的なもの』執筆以降、福田は、今まで明確にした人間観を、具体的な周囲の現象に

適用して本質と現象の交点を示すことにより、次々に継起し消滅してゆく、あらゆる現象的な問題の背後に不易の本質的問題点が控えていること、どういう思考を経て現象から本質に迫ることができるかを明らかにしようと務める。¹⁷

それらは、性の問題であり、欧米の精神に対処する日本の知識階級の弱点であり、人間心理における意識と無意識との間の微妙な関係であった。そこには、常に西洋と日本の文化の差異が念頭にあり、日本が西洋を取り入れる場合の重要な処方箋で、かつ注意喚起であった。

こういった考えは何もこの時期の特徴ではなく、第1期からの変わらぬ関心事項、すなわち、日本の近代化問題である。昭和41年、『福田恆存評論集』を出版する際、その第4巻の後書に、第1期の『近代の宿命』(昭和22年、36歳)の後書を引用し、その事を述べている。

終戦後ぼくの関心の赴くところ、おのづと1つの主題を形づくった。それは、ヨーロッパの近代を背景に日本の近代の特殊性を設定したいといふことにほかならなかった。(中略)もしぼくたちの近代に宿命的な悲劇性と複雑性があるとすれば、それは近代の確立の未熟といふことそのことのうちにではなく、未熟でありながらそのままにヨーロッパ近代の主題を共有してしまつたことのうちに求められよう。

(『評論集4』後書p. 291)

福田は第1期から既に完成した相貌を見せていたと述べたが、この近代化問題からも、それが十分窺える。外遊後、「偽物はずいぶん偽物にでしかない。彼我の差を見極めつつ、自分の歩幅でゆっくり歩こう。」¹⁸ と、機会を見てそう主張した。

外国からの帰国後に書いた、『平和論の進め方についての疑問』によって論争に巻き込まれ、また現代仮名遣いに対する不満を『国語改良論に再考をうながす』と題して発表し、その後、金田一博士と論争した。以前にも、多くの論争をし、また、昭和35年にも、『常識に還れ』で政治論争に巻き込まれる。

しかし、福田は「一度も論争に負けたことがない。」

と言う。¹⁹ その結果、勝った責任を背負い込むことになった。論争したことを自分の責任で片づけなければならなくなり、益々追い込まれた。すなわち、政治・社会の問題の背景に道德・文化の問題があることを指摘するだけでなく、そのまま道德・文化の問題として考えなくてはならなくなった。

昭和34年(48歳)に小汀利得と共に国語問題協議会を設立する。10年前の『日本人の思想的態度』にも、既に言葉に対する関心は表れているが、言葉は福田の重視する問題であり、この年はこの問題に終始する。

言葉は、後述するが、近代化問題と軌を一にする重要事項であって、この期に論争等で表面化したのが、当初からの関心事項なのである。²⁰

この期に行動を起こした大きな特徴がある。昭和38年(52歳)に、劇団「雲」及び現代演劇協会を設立したことである。設立後は、劇団・協会の運営、シェイクスピア全集の翻訳を中心とした活動、特に自らの宿命に生き、終生の課題であった日本の近代化問題に取り組むことになる。最後まで自分の志を貫く孤高の人であった。

注

- 1 『省けん録』にこうある。「東洋の道德と、西洋の藝術と、精粗遺さず、表裏兼ね該ね、(略)」
- 2 福田恆存訳『現代人は愛しうるか』に、人間には英雄を認めてこれに信仰を捧げんとする集団的側面があることを述べている。
- 3 「清潔で公平な人だった」平成6年11月21日の産経新聞記事
- 4 「福田恆存の死を悼む」平成7年1月号 月曜評論(現在は廃刊)記事
- 5 『評論集4』後書p. 290
- 6 『現代人は愛しうるか』筑摩書房 昭和45年9月10日 D・H・ロレンス著 福田恆存訳
- 7 『評論集4』後書p. 290
- 8 『ロレンスⅢ』における主要な主張。
- 9 『ロレンスⅡ』における主要な主張。
- 10 『評論集3』後書p. 343
- 11 『全集第1巻』覚書p. 667
- 12 『論争のすすめ』p. 245、p. 253
- 13 『評論集1』後書p. 294

- 14 『評論集3』後書p. 344
- 15 『評論集4』後書p. 287~289
- 16 『評論集2』後書p. 320
- 17 『評論集5』後書p. 270
- 18 『評論集4』後書p. 292
- 19 『評論集6』後書p. 365
- 20 『評論集7』後書p. 379

(Received: May 31, 2010)
(Issued in internet Edition: July 1, 2010)